

木産協第3回青年層交流会開催 「労組の存在意義」考えながら交流深める



2月23日～24日、横浜市で木産協第3回青年層交流会を開催し、全国から17人が参加して、観光・夕食会・学習会などを通じて交流が深められた。

交流会第1日目の昼の部では、参加者は3つのグループに分かれてレク（開催地である横浜市内の見学）を行い、さらに、夜には、

全体での夕食懇親会で親睦がはかられた。

交流会第2日目の部では、まず、木産協の西本範彦議長が、自分たちが労働組合に加わり活動することの意味を問う問題提起。西本議長は、「私たちが労組に集い活動するのは、同じ立場にある自分たち職場仲間の中に『弱者』をつくらないために、団結して、要求を出して、労使対等で交渉して、自分たちの労働条件の決定に関与していくこと」とした上で、「労組活動や青年部の活動になかなか人が集まってくれないとの嘆きもあろうが、そこには何らかの原因があるからであり、その点を究明し克服していくことが必要」、「とりわけ青年層の皆さんに対しては、『知りたい』・『興味がある』と思ったことについて、うまく時間をつくりながら、いろいろな方法でとことん調べてみるように努めてほしい」と述べた。

この後、参加者は3つの分散会に分かれ、西本議長の話も踏まえ、「現在、会社または労働組合について不満に思っていること、または、よいところだと思っていること」について、情報・意見交換を行った。

分散会討論を通じては、労働組合については、総じて、少なくない組合員から必ずしもしっかり評価されてはいない現状にあるとの認識のもと、「より多くの組合員に参加してもらうためには、組合行事は平日開催か休日開催のどちらがよいかで悩ませられている」、「組合執行部の世代交代に伴う引継ぎをしっか

り行うことが重要」、「組合があるからこそ、賃上げが厳しい職場でも『現状維持』ができているんだということをもっとアピールすべき」、「増産・超勤が見込まれる状況など、情報を早めにキャッチし、必要な労使交渉を行うことは、組合の大きな存在意義。交渉にあたっては、会社側の生産優



先の考え方に対して、安全優先、そのための人員確保、超勤(および超勤手当)というものはあくまで『例外』であり所定内労働に基づく所定内賃金で生活するのが本来の姿であること、などをしっかり訴え続けよう」、「有給休暇を取りやすい環境をつくっていくことは組合の大きな役割」といった発言があった。

その一方で、会社については、「急な異動が頻繁にあり困らせられている」、「不具合を起こしている電気系統のメンテナンスなどが後回しにされがちな傾向がある」、「新規採用が抑えられている」、「超勤が多い」といった、まさに、労働組合が、しっかり労使協定締結などを行い、それらを会社に守らせていくことで、組合の存在意義を発揮することとなる課題が並んだ。

交流会のまとめで、西本議長は「分散会討論で『組合のいいところ』があまり



出なかったのは残念だが、『いいところ』というものは普段はあまり見えないもの。いずれにしても、私も、もっと頑張らなければならないと決意を新たにしたところだ」と述べ、「団結ガンバロウ」三唱で交流会は閉会した。